サルヴォダヤ運動における日印関係

菊地
恵理

はじめに

サルヴォダヤとは、「サルヴァ（万物）」の「ウダヤ（向上）」、つまり「すべての者の向上」を意味する言葉である。独立以前のインドにおいて、この「サルヴォダヤ」思想のもと、マハトマ・ガンディーが中心となり差別や貧困の撤廃、村落自治の実現を目指す社会運動がおこった。このような「すべての者の向上」を目指した社会的な動きが「サルヴォダヤ運動」である。

ヴィノバ・バーヴェー、J.P.ナーラーヤンが指導者となった 1950－60 年代は、ガンディー亡き後のサルヴォダヤ運動の最盛期であったと位置づける事が出来る。本稿はこの時期のサルヴォダヤ運動における日印提携の実態を探り、日印交流史の新たな一面を明らかにしようと試みるものである。

第１章　サルヴォダヤの概略

「サルヴォダヤ」という言葉は、ジョン・ラスキンの著書『この最後の者にも』という表題をグジャラート語に翻訳した時に作り出された造語である。この著書に衝撃を受けたガンディーは、それまでの資本主義や社会主義とも違った、人間の心の変革を起こすという独自の改革思想に目覚めた。また、彼自身もアーシュラムと呼ばれる生活共同体をつくり、手工芸や農作業などの労働を重んじる質素な生活を実践するようになった。

ガンディー亡き後の 1950－60 年代、サルヴォダヤ運動はヴィノバ･バーヴェーと J.P.ナーラーヤンによって指導されていった。ヴィノバは、地主の良心に訴えかけて土地の寄進を促し、土地を持たない農民にそれを分配する「ブーダーン(土地寄進)」運動を起こし、後にこの動きは「グラームダーン(村落寄進)」運動へと発展を遂げていった。

J.P.ナーラーヤンはそれまで政界で活躍していたが、1954 年にサルヴォダヤ運動に自らの身を捧げる宣言をし、ヴィノバの一連の運動に参加した。後に彼は、60 年代以降衰退を見せていったサルヴォダヤ運動を立て直すために、「全面革命」運動を指導し、70 年代にその運動は盛り上がりを見せていくこととなる。

ヴィノバと J.P.が指導した運動は、非暴力的な手段によって社会と人間の根本的な変革を起こすことを目指していた。そして彼ら自身、各々のアーシュラムを拠点としてサルヴォダヤ思想を自らの生活で実践していた。これらの点から、ヴィノバと J.P.が指導した運動は、ガンディーがインド独立運動期に適応していたものと同一の原理を独立後のインドの社会問題に適用したものであったと言える。

第２章　1950－60 年代の日印関係

では、1950－60 年代の日本とインドはどのような国家関係にあったのだろうか。1952 年、サンフランシスコ講和条約が発効され戦後の日本が国際社会への復帰をはたした。この講和会議に出席しなかったインドは、日印間で単独の平和条約を締結したが、これはサンフランシスコ講和条約より日本に対して寛大なものであった。55 年には、第一回アジア・アフリカ会議（バンドン会議）が開催され、日本も戦後初めてアジアの政治的な会合に出席した。

平和・中立主義を貫く独自のネルー外交は、当時の日本において次第に評価されていき、その関心は 57 年のネルーの訪日で頂点に達した。訪日したネルー首相に対する日本国民の歓喜は熱狂的であり、その後の日印関係を発展させる契機となった。

こういった政治面でのインドに対する関心の高まりとともに、50 年代は文化面でも日印の交流を深めようとする動きが始まっていた。49 年 9 月には、東京の小学生の要望に応えてネルー首相から上野動物園へインド象「インディラ」が贈られ、50 年代における日印間係の発展とネルーの平和外交の象徴的な役割を果たした。51 年には、インドで第一回アジア競技大会が開催され、56 年には「日印文化協定」が調印された。

1958 年から 60 年代前半にかけての日本とインドは、両国とも描いてきた政治の理想像と実態のあいだにある矛盾や食い違いが表面化してきた時代であった。インドでは第 2 次 5 カ年計画の失敗が外貨不足や食糧危機をもたらし、外国の援助を求める必要性に迫られていた。さらに、中印紛争が勃発したことで中立・平和主義外交の理想は崩れ、インドは国際政治における地位を一変させた。64 年にはネルーが死去し、インドは対中国戦争に対する敗北や、ネルーを失った痛手から回復することに力を尽くさねばならなかった。

日本では 1960 年の安保闘争によって国内の情勢は揺れ動く一方、経済面では高度成長を着実に成し遂げていた。50 年代中ごろまで、日本人はネルーという存在を通して、インドに対し期待や希望が織り込まれたような感情を抱いていた。しかし 50 年代末から 60 年代にかけては、自らを先進国の立場に置き、インドは援助を受ける客体の一つとして捉えるようになってきた。

第３章　サルヴォダヤ運動と日本人

第３章では、第１章で見てきた 50－60 年代のサルヴォダヤ運動と関係を持っていた日本人や団体について、それぞれの活動を具体的に見ていく。

・「印度農村振興奉仕団」

この奉仕団は児玉亀太郎という人物の発案で、9 人の青年によって結成された。彼らは日本式模範農場を作るという目的のもと、当時サルヴォダヤ運動と強い関わりがあった日本山妙法寺と結びつき、インドのビハール州に派遣された。彼らはそこで農業に従事し、普通の農家の 2 倍から 3 倍の収穫量を出すことに成功した。その後奉仕団の青年たちは、州立工芸研究所、州立の農業試験場や大学、日本大使館の経営する日本式展示

農場など、各々が違った場所へと派遣され、指導にあたった。なお、彼ら奉仕団の活動が機縁となって、1962 年、「模範的な農場の設置のための日本国政府とインド政府との間の協力」が締結され、両国政府の合弁事業としてインド国内 4 か所に日本農業の「展示農場」が設置されるに至った。

この奉仕団のうちの一人であった池田運は、サルヴォダヤ運動と最も深い関わりを持った人物であった。ラージギルでの任務を終えた池田は、ヴィノバや J.P.の創立したアーシュラムへ入り、サルヴォダヤ運動の一員として活動した。特に J.P.との信頼関係は厚く、彼のアーシュラムでは、日本から技術者を招く計画の手伝いや、アーシュラムの学校での指導、日々の農作業などに尽力した。

・杉山龍丸

龍丸は、日本山妙法寺の一人の僧との再会をきっかけにガンディーの弟子達と関係を持つようになり、彼らへの農業や手工芸の技術指導を日本で行っていた。その教育活動はネルー首相の知るところとなり、彼はサルヴォダヤ大会に招かれ渡印する。そこで彼はヴィノバと共に数日行脚し、いくつかのアーシュラムを訪問している。

この他にも、インドのアーグラーにアジア救ライ協会インド・センターを設立し、インドの救ライに無償奉仕した宮崎松記、インド教育連盟の要請で渡印し、アーシュラムでの生活を終えた後、シャンティニケタンのタゴール大学で 10 年以上勤務していた牧野財士、ヴィノバの運動に深く共感し、その運動に従事した池ノ谷由里子などがサルヴォダヤ運動に関わって活動していた。

おわりに

1950－60 年代のサルヴォダヤ運動における日印提携について特徴的なのは、そのほとんどが個人レベル・民間レベルで行われていたという点である。そして、その活動がインド政府の知るところとなり、政府レベルでの活動に発展していったことも特徴の一つである。政府レベルで行われていた対インド技術協力の例としては、コロンボ・プランがあった。これは形態的にはサルヴォダヤ運動のなかでの日印提携と一見同じように思われるが、両者は根本的に目指すところが違っていた。

これほどまでにサルヴォダヤ運動の中での日印関係が発展した要因は、50－60 年代の日印の国家関係が比較的友好であったという背景のもと、当時の日本の農業を中心とした技術がサルヴォダヤ運動にとって必要とされていたこと、日本山妙法寺という存在があしがかりとなっていたことが考えられる。

50－60 年代のサルヴォダヤ運動は、全インドの政治的動向にも影響力を持つ非常に大規模なものであった。そのような運動に日本人が参加し、サルヴォダヤ運動の指導者たちや、ネルー首相と信頼関係を結ぶに至る活動が存在していたという事実は、日印交流史において評価されるべきものである。